

ロシア語教師ドウシャン・トドロヴィチと第一次世界大戦

——辺境地域出身者のナショナル・アイデンティティ——¹

柴 宜弘

はじめに

1. 出自の特定と生まれ故郷スレム
2. ロシア語教師として
3. 第一次世界大戦と塞国救難会の活動

むすびに代えて

はじめに

「中欧」²の現代史を振り返ると、帰属する国を離れているあいだに自国が消滅し、新たな国家が誕生することに伴い、国籍の選択を迫られる例はそれほど珍しくない。最近では、2016年5月にボスニア・ヘルツェゴヴィナのセルビア人共和国で死去した歌手のヤドランカ・ストヤコヴィチ **Jadranka Stojaković** がその一例である。ヤドランカはボスニア・ヘルツェゴヴィナの首都サラエヴォで生まれ、旧ユーゴスラヴィアにとどまらず、ヨーロッパ規模で音楽活動をしていた。1988年にレコーディングのため来日し、日本で音楽活動を続けているうちに、1991年からユーゴスラヴィア内戦が始まり、祖国は解体してしまった。ヤドランカが愛した旧ユーゴスラヴィアはなくなり、彼女の国籍は自動的にボスニア・ヘルツェゴヴィナに切り換えられた。ヤドランカの帰属意識はボスニア・ヘルツェゴヴィナより旧ユーゴスラヴィアに強かったが、国籍の変更を余儀なくされた。

このような事例は、第一次世界大戦までハプスブルク帝国（1867年から、正式にはオーストリア・ハンガリー君主国）、ロシア帝国、ドイツ帝国のもとに置かれていた中欧の諸民族が第一次世界大戦の結果、これら三つの帝国の崩壊を受けて、自らの国家を再建あるいは新たな国家を建国した時、さまざまな形で

¹ 本稿は、同じ題名の論文「ロシア語教師ドウシャン・トドロヴィチと第一次世界大戦——辺境地域出身者のナショナル・アイデンティティ」『中欧研究』第3号を修正し、その後判明した事がらを加筆したものである。

² 「中欧」はあいまいな地域概念だが、ここではバルカンの一部も含む広い概念と考える。これについては、柴 宜弘「『中欧研究』の創刊に寄せて」E-ジャーナル『中欧研究』創刊号、2015年12月を参照。

現れた。

明治末期から昭和10年代、具体的には1909年から1940年まで、31年間も東京外国語学校(現在の東京外国語大学)でロシア語教師を務めたセルビア人のドゥシャン・トドロヴィチ(Dušan Todorović, 1875年2月20日~1963年4月20日)³もその一人である。トドロヴィチの場合、日本滞在時に第一次世界大戦が生じ、祖国セルビアは新生国家セルビア人・クロアチア人・セルビア人王国(ユーゴスラヴィア王国)に統合されてしまう。かれのように国外にいるうちに、祖国の形が変わってしまう事例は、敵国の捕虜となり生活をしてきた将兵のあいだで顕著である。

ハプスブルク帝国軍の将兵がロシア戦線に赴き、「敵国」であるロシア帝国軍に投降して捕虜となったチェコ人やスロヴァキア人については、のちのチェコスロヴァキア軍団⁴との関連で比較的知られている。南スラヴのクロアチア人、セルビア人、スロヴェニア人の投降者もいたが、とくにセルビア人のなかにはハプスブルク帝国軍から脱走し、故郷に戻ったのちにロシア軍に加わる兵士も少なくなかった。1916年4月、チェコスロヴァキア軍団に先んじて、ロシア皇帝の指揮下でこれら南スラヴの捕虜と、当時コルフ島に撤退していたセルビア王国軍の将校からなる第一セルビア義勇軍(主としてセルビア人)が結成され、ドブルジャ戦線に送られた⁵。セルビア義勇軍については稿を改めて検討するが、第一次世界大戦の終結に伴い、南スラヴの捕虜たちは新国家セルビア人・クロアチア人・スロヴェニア人王国が建国されることにより、あらたな国籍をもつことになった。

日本でも、同様の事例を見いだすことができる。第一次世界大戦に参戦した日本は、1914年8月にドイツの租借地である山東半島の膠州湾領有を目的とし

³ 日本滞在当時の新聞や雑誌の多くでは、トドロヴィチは「ドシャン・トドロウイチ」、ロシア語教師の本人が申請したものと思われるが、東京外国語学校の正式名では「ドシャン・ニコラエウイチ・トドロウイチ」とロシア語風に表記されていた。しかし、セルビアでは一般的に、名前と姓のあいだに父称を付けない。

⁴ チェコスロヴァキア軍団については、とりあえず林忠行「チェコスロヴァキア軍団——未来の祖国に動員された移民と捕虜」山室信一・岡田暁生・小関隆・藤原辰史編『現代の起点 第一次世界大戦 第2巻 総力戦』岩波書店、2014年、55-77ページを参照。

⁵ セルビア義勇軍については、セルビアでの最近の研究としてミツィチの以下の4冊をあげておく。Милан Мицић, *Српско добровољачко питање у Великом рату (1914-1918)* [大戦争期のセルビア人義勇兵問題 1914-1918年], Банатски културни центар, Ново Милошево и РадиоТелевизија Србије, Београд, 2014; Милан Мицић, *Незапамћена битка: Српски добровољци у Русији 1914-1918* [忘れられた戦い—ロシアでのセルビア人義勇兵 1914-1918年], Банатски културни центар, Ново Милошево, 2016; Милан Мицић, *Српски добровољци 1914-1918: Животи, сећања* [セルビア人義勇兵 1914-1918年—かれらの生活と回想], Банатски културни центар, Ново милошево, 2016; Милан Мицић, *Американци: Српски добровољци из САД (1914-1918)* [アメリカ人—合衆国のセルビア人義勇兵], Банатски културни центар, Ново Милошево, 2018

て出兵した。11月にドイツ軍は降伏し、4700名のドイツ軍将兵が日本軍の捕虜となった。日本の各地に分散して収容された捕虜は、1919年まで収容所での生活を余儀なくされた⁶。ドイツ軍捕虜と言っても、実際にはハプスブルク帝国捕虜も400人ほど含まれていた⁷。ハプスブルク帝国の捕虜のなかには、チェコ人、スロヴァキア人、イタリア人、そして南スラヴのクロアチア人、スロヴェニア人もいた。第一次世界大戦終結後の捕虜の本国送還に際して、かれらの国籍選択の問題が生じた。当時の日本は捕虜の意志を尊重して、慎重に国籍を選択させたとされる⁸。

ドゥシャン・トドロヴィチの場合はどうだったのだろうか。ロシア語教師として来日したのは1909年であり、東京外国語学校で教鞭をとっているあいだに第一次世界大戦を迎えた。「ロシア人」としてロシア語を教えていたトドロヴィチは、第一次世界大戦が始まり、1914年秋に日本赤十字社がセルビア赤十字社を通じて、戦禍の続くセルビアに包帯などの救援物資の支援を行うとのニュースを聞きつけると、セルビアへの人道支援にのりだした⁹。セルビアに対する強いアイデンティティが見てとれる。第一次世界大戦が終結し、セルビア人・クロアチア人・スロヴェニア人王国（1929年にユーゴスラヴィア王国と改称）が建国されると、トドロヴィチは戦間期を通じて在外公館が設置されない状況のもと、同国から要請を受けていわば「民間大使」として日本で活動した。

トドロヴィチは、ロシア語関連の教科書¹⁰以外に回想記や自らの考えを記したエッセイなどをほとんど残していない。そのため、ロシア、セルビア、ユーゴスラヴィア、日本そしてアメリカに対する彼の思いや自らをどのように意識していたのかなどについては、周辺の資料から推測する以外にない。本稿では、彼が断片的に書いた数少ない記事や当時の新聞・雑誌の記事を用いて、第一次

⁶ 第一次世界大戦期の捕虜の労働の様子やかれらの生活については以下を参照。大津留厚『捕虜が働くとき——第一次世界大戦・総力戦の狭間で』人文書院、2013年。

⁷ この400人は、ハプスブルク帝国海軍巡洋艦・皇后エリザヴェートの将兵の数である。瀬戸武彦『青島（チンタオ）から来た兵士たち——第一次大戦とドイツ兵俘虜の実像』同学社、2006年、61ページ。

⁸ Boštjan Bertalančič, “Exploring the Origins of Japanese-Yugoslav Relations during World War I through the Case of Yugoslav POWs in Japan”, *The Electronic Journal of Central European Studies in Japan*, No.1, Dec. 2015 を参照。

⁹ トドロヴィチのほかに、セルビア赤十字社などを通じて、セルビアに物資の援助を行った個人の例は他にも見られる。イギリス人女性で看護師からセルビア軍兵士として従軍したフローラ・サンデスは休暇で帰国すると、イギリスでセルビア兵のための慰安基金をつくり、募金集めに奔走して救援物資をセルビアに送った。林田敏子「女性であること、兵士であること——バルカン女性兵士フローラ・サンデスの大戦経験」山室・岡田・小関・藤原編、前掲書、230-231ページを参照。

¹⁰ 東京外国語大学附属図書館所蔵の日本語による教科書は以下の2冊である。デ・エヌ・トドロヴィチ『露西亜語書簡文』大倉書店、1921年；『日本人用實用露語発音指針：新正字法適用』大倉書店、1923年。

世界大戦前後の時期に彼のナショナル・アイデンティティが「ロシア人」、「セルビア人」、「ユーゴスラヴィア人」のあいだで、どのように揺れ動いたのか、その一端を示してみたい。

1. 出自の特定と生まれ故郷スレム

2015年にトドロヴィチの日本での活動を紹介¹¹した際、彼の生没年のみならず出生地も特定できていなかった。本稿ではまず、知識人の一人ではあるが、「普通の人」の出自を明らかにするための研究・調査の過程を示しておきたい。唯一の手がかりは、1930年代に来日したセルビアの日刊紙『ポリティカ』特派員ヴケリッチの書いた記事¹²だった。その記事のなかに、トドロヴィチが勲三等瑞宝章を受けたとの叙述があり、柴理子がそれを手掛かりにアジア歴史資料センターのデータベースで検索すると、トドロヴィチ叙勲関連のファイルを見つけることができた¹³。このファイルにはトドロヴィチの経歴が含まれている。それによると、1875年2月22日ベオグラード生まれとなっている。東京外国語学校の大学史¹⁴や同大学のロシア会が発行する雑誌¹⁵を通じて、彼の日本滞在時の活動については追うことができたが、1909年来日する以前のロシアでの経歴やトドロヴィチ夫妻の子供たちが暮らすアメリカに向けて日本を発った1940年以後のアメリカでの生活については、なかなか確証を得ることができなかった。

その後、アメリカで出されている、家系や家族の歴史をたどるためのウェブサイト「アンセストリー・コム」で検索してみると、不完全ではあるが、トドロヴィチの家系を見つけることができた。夫妻の墓の写真や数枚の家族の写真も掲載されていた。カリフォルニア州コルマにあるセルビア人墓地の墓碑に刻まれた生没年は、1875～1963年であり、これらの写真の提供者は、Dana Dusan

¹¹ 柴宜弘「ドゥシャン・トドロヴィチ——ロシア語を教えたセルビア人」柴宜弘・山崎信一編『セルビアを知るための60章』明石書店、2015年、323-327ページ。

¹² ヴケリッチが日本滞在時に書いた記事の翻訳書は、山崎洋編・訳『ブランコ・ヴケリッチ 日本からの手紙——ポリティカ紙掲載記事(1933～1940)』未知谷、2007年。

¹³ 柴理子『『白系ロシア人』音楽家カテリーナ・トドロヴィチの日本滞在(1)——1910年代までの軌跡』E-ジャーナル『中欧研究』第2号、2016年11月、注14を参照。JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.A10113356400、叙勲裁可書・昭和15年・叙勲巻20・外国人1(国立公文書館)である。本論文では、この資料を共有させてもらった。

¹⁴ 『東京外国語大学史』東京外国語大学、1999年。野中正孝編著『東京外国語学校史——外国語を学んだ人たち』不二出版、2008年。

¹⁵ 『會報』(東京外語露西亜会)、昭和1年(1926年)第3号から年2回発行。

Todorovic となっている¹⁶。「アンセストリー・コム」の掲示板で連絡をとりたいと呼びかけたところ、幸運にもダイナ氏からすぐにメール連絡があった。ダイナ氏はドゥシャン・トドロヴィチ夫妻の4人息子の次男ドラグティンの息子、つまり数人の孫の一人であり、定年退職しカリフォルニア州に在住しているという。ダイナ氏は、トドロヴィチとピアニストのカテリーナ夫人¹⁷が1940年に日本を去り渡米して以来、生涯にわたり住んでいたカリフォルニア州のパロアルトから車で2時間ほどの町に暮らしている。

パロアルトのホテルで会ったダイナ氏は、祖父の名前ドゥシャンを父称として使っていることから察せられるように、トドロヴィチ夫妻、とくに祖父の生い立ちに関心を持っているようだった。1963年に祖父が死去した当時、小学生だったので、祖父の思い出は断片的であり、その生い立ちや人生については面と向かって聞く機会がなく、わからないことだらけだという。夫妻が日本滞在時に授与されたさまざまな勲章や招待状、ロシア語関連の著書の表紙、友人・知人との数多くの写真を見せていただいた。その後も、メールで交信するたびに、まだ整理できていないがこんな写真も見つかったとってファイルを送ってくれた。しかし、奇妙なことだが、トドロヴィチの出自については手がかりが得られないままだった。

ヴケリッチがトドロヴィチ本人とのインタビューをもとに書いた記事に、かれの生い立ちが次のように記されている。「セルビアを離れたのは、まだ19歳の若者のときで、高校を出てベオグラード大学工学部の第一学年を終了してからだ。ロシアで、ペテルブルクで、大学を卒業し、物理と数学の博士号を取得した。その頃、妻と知り合った」¹⁸。これを頼りに、セルビア公文書館 Arhiv Srbije で調査を始めた。最初に確認が取れたのは、手書きのロシア政府給費留学生名簿¹⁹であった。生年から類推して1893年と1894年を見てみると、1894年にトドロヴィチがペテルブルク大学に留学したことが判明した。しかし、この名簿には氏名以外の情報は書かれていなかった。ロシア留学前にベオグラード大学（当時はヴェリカ・シュコラ Velika škola (高等専門学校)、1905年からベオグラード大学) 工学部に入学しているので、ベオグラードのギムナジウムに在籍した可能性が強い。ベオグラードの教育学博物館 Pedagoški muzej Beograd の資料室で、1890年代ベオグラードに二つあったギムナジウムの在校生を調べることにした。

ベオグラード第一ギムナジウムは1989年に創立150年を記念して卒業生名簿

¹⁶ Ancestry.com の Find a Grave というサイトを参照。

¹⁷ カテリーナについては、柴 理子、前掲論文を参照。

¹⁸ 山崎洋編訳、前掲書、「23. 1934年7月2日(月) 滞日25年のセルビア人、教え子には日本の大臣、将軍、外交官」、120ページ。

¹⁹ Архив Србије, МПС-п, 1894, 27,45

を発行していた。1893-94年度卒業生30名のなかに、トドロヴィチの名前があった²⁰。この資料室にトドロヴィチの7年時(ギムナジウムは8年制)の成績も残されていた。履修した11科目のうち、5科目が5段階評価の5、6科目が4であり、この学年での成績はトップクラスに属していたことが判明した²¹。7年時ではフランス語かドイツ語が選択語学だったようで、トドロヴィチはドイツ語を選択している。ロシア語の履修ができたのかどうか定かではない。一方、理系科目の幾何は5だが代数は4、植物は5だが物理が4なのは興味深い。当時のベオグラード高等専門学校は法学部、工学部、神学部の3学部編成であり、トドロヴィチは工学部に進学した。

ベオグラードのギムナジウムを卒業したことからして、また先にふれたように、勲三等瑞宝章の叙勲に際しての経歴にベオグラード生まれとあることから、出生地と両親を特定するため、ベオグラード市歴史文書館 Istorijski arhiv Beograda で、出生届簿 *matična knjiga* や教会への結婚届簿 *matična knjiga venčanih* の該当年を調べたが、トドロヴィチの名を見つけることは出来なかった。彼の孫ダイナは、父ドラグティンの出生地はセルビア南部の都市ニシュだと言っていたので、ベオグラード市歴史文書館での調査の前に、ニシュの歴史文書館 Istorijski arhiv Niš に問い合わせ、1904年生まれのドラグティンの出生届を調べてもらったが、見つからないとの返答であった。

ベオグラードの文書館でも、ニシュの文書館でも、トドロヴィチの出自に関する手がかりが得られず、最後に調べたのがセルビア文書館にあると聞いたベオグラード高等専門学校の学籍簿 *delovodnik* であった。学籍簿を調べると、1893年の工学部入学者の中にトドロヴィチの名前を容易に見つけることができ、本人の自筆による入学届 *prijavni list*²²と奨学金申請願 *molba za državni blagodejanac*²³も見ることができた。かなり遠回りをしてしまったが、ようやく、出生地と父親ニコラ・トドロヴィチの職業にたどり着くことができた²⁴。

青色の一枚の入学届けには、保護者名として父ニコラ・トドロヴィチ *Nikola Todorović*、スルチン *Surčin* の皮革職人 *ćurčija* と書かれている。生年月日は1875年2月20日²⁵、出生地はスルチンであった。宗教はセルビア正教、国籍はセル

²⁰ Прва београдска гимназија «Моша Пијаде» 1839-1989 [ベオグラード第一ギムナジウム「モシャ・ピヤデ」、1839-1989年], Београд, 1989, 436.

²¹ Оцене ученичког успеха у I београдској гимназији 1891/92 [ベオグラード第一ギムナジウム生徒の学業成績、1891-92年], Београд, 1892.

²² Архив Србије, Велика школа, деловодник за 1893, бр.1209.

²³ Архив Србије, Велика школа, деловодник за 1893, бр.2194.

²⁴ この調査の過程で、ベオグラード大学哲学部歴史学科のミラン・リストヴィチ教授から様々な教示と手助けを受けた。

²⁵ 注9の叙勲関連のファイルにある履歴書(東京外国語学校の作成)では、生年月日が1875年2月22日になっている。

ビア、経済状態は貧困、1893年ベオグラード第一ギムナジウム卒業したことが確認できた。経済状態を貧困と申告していることから、30パラの収入印紙の貼られた奨学金申請願とともに、ベオグラード市地方裁判所 *Sud opštine varoši Beograda* 発行の証明書 *uverenje* が提出されていた。証明書には、父親ニコラが動産、不動産をいっさい所有せず、不労所得や年金を受けていないこと、非課税者であること、ドゥシャンのほかにギムナジウム7年生の弟イリヤ *Ilija*²⁶ を扶養していることなどが書かれている。この証明書の通りだとすると、トドロヴィチ家は皮革職人の父ニコラのもと、かなり困難な経済状態にあったことになる。このような状態で、ドゥシャンと弟のイリヤはどのようにしてベオグラードのギムナジウムに進学できたのか疑問が残る。ベオグラードに親類がいたのだろうか、あるいは家族でベオグラードに転居していたのだろうか。母親と姉妹についての情報は一部わかるようになった²⁷。

ここで言及しておかなければならないことは、スルチンという出生地である。スルチンは現在、ベオグラードのニコラ・テスラ *Nikola Tesla* 国際空港の所在地として知られている。ベオグラード市街地からサヴァ川を越えて、西へ20キロほどしか離れていない。いまはベオグラード市の一部になっているが、歴史をさかのぼってみると、セルビアの北西部、クロアチアとの国境地帯はスレム

²⁶ トドロヴィチの弟イリヤ・トドロヴィチ (1877-1915) もベオグラード大学からペテルブルクに留学し、ペテルブルク軍事医学アカデミーを卒業して、セルビアに戻り軍医として勤務した。第一次世界大戦が始まるとスコピエ方面軍の軍医に任命されたが、1915年3月11日にニシュで病死した。イリヤ・トドロヴィチ大尉の死亡記事はベオグラードで発行されていた新聞『プラヴダ』の3月13日付二面と『ノーヴォスティ』の3月16日付一面に見つけることができるので、高名な軍医だったようである。 *Правда, 13.марта 1915: Новосту, 16.марта 1915.*

1915年には父親のニコラも死去しており、親族による二人の3回忌を知らせる記事が1918年3月20日付の『ベオグラード新聞』の四面に載っている。この『ベオグラード新聞』は第一次世界大戦期 (1915-18年) にドイツ占領軍の管轄下で出された新聞なので、キリル文字ではなく、ラテン文字が使われていることは興味深い。3回忌は3月23日に、ベオグラードのヴァズネセニエ (昇天) 教会で行われた。 *Beogradske novine, 20.марта 1918.*

²⁷ 後述するように、トドロヴィチは第一次世界大戦が始まると、祖国セルビアのための支援活動を行った。日本赤十字社を通じてセルビア赤十字社に寄付をした際、新聞のインタビューに答えて次のように語っている。「國の小さなことや國民の武勇なことで日本と似ている塞國に居る私の兄弟は今戈を執って塙國と戦って居るし、私の姉妹は塞國赤十字社の為に武勇な傷病兵の看護に努めて居る」『東京朝日新聞』1914年10月4日付朝刊。ここから、トドロヴィチには、兄弟だけでなく姉妹もいたことがわかる。ベオグラードで発行されていた新聞『プラヴダ』の1927年11月30日付6面に、ユルカ・N・トドロヴィチの死亡広告が掲載されている。葬儀の喪主は姉のマラ・T・ラディヴォイェヴィチ (当時、教育省参与で年金生活者) 夫人とトドロヴィチ、そして弟の故イリヤである。母の名はユルカと記されおり、11月29日に死去したことがわかる。 *Правда, 30.нояembra 1927.* 父親ニコラが死去したあと、1916年時点で母親ユルカと同居していたミルカ・M・ペトロヴィチ夫人は妹と思われる。 *Beogradske novine, 2. ноября 1916.*

Srem (クロアチア語ではスリエム Srjem) と称され、セルビア人、クロアチア人、ドイツ人、ハンガリー人、スロヴァキア人、ルーマニア人、ウラフ、ルシーン人の混住する地域である。ブドウなど果樹栽培に適した肥沃な土地であり、古来、人びとの往来が盛んであった。

スレムは12世紀から16世紀には、ハンガリー王国の支配、16世紀から18世紀にはオスマン帝国の支配を受け、18世紀から第一次世界大戦期まではハプスブルク帝国の統治下に置かれた。1848-49年、ハンガリーでハプスブルク帝国の統治に対する革命が生じた際、クロアチアと同様、スレムを含む南ハンガリーのセルビア人居住地でも、ハンガリー人支配、具体的には母語の使用を求めて反乱が発生した。1848年5月には、スレムの中心の町カルロヴツィ Karlovci で、スレム(ドナウ川とサヴァ川に挟まれた地域)、バラニャ(ドナウ川とドラヴァ川に挟まれた地域)、バチュカ(ティサ川とドナウ川に挟まれた地域)およびバナト(ムレシュ川、ティサ川、ドナウ川に挟まれパノニアに続く東側の地域)を含む地方に「セルビア・ヴォイヴォディナ」の創設が宣言された。これが、現在のヴォイヴォディナの領域の基礎をなしており、この宣言では、ハプスブルク帝国内のクロアチアの行政単位であるクロアチア・スラヴォニア・ダルマツィア三位一体王国と完全に同等で、自由な政治的統一体であることが示された²⁸。

1849年に一連のセルビア人の動きが鎮圧されると、「セルビア・ヴォイヴォディナ」は「セルビアおよびティミショアラ・バナト公国」に再編され、スレムとバナトの南部の軍政国境が復活した。軍政国境地帯とは、ハプスブルク帝国がオスマン帝国の侵攻に備え、16世紀前半に戦争で荒廃した国境地域に築いた行政区分である。この地帯の農民は免税特権をもつが、戦時には兵士として軍役に就くことが義務であり、「自由農民にして兵士」²⁹と称される。軍政国境には、皇帝の呼びかけに応じてハプスブルク帝国内だけでなく、隣接するセルビアからも多くが移住したため、多民族の混住する地域であった。これは1881年まで存続するが、後述するようにスレムでは1871年に軍政が廃止されているので、トドロヴィチが生まれた1875年当時、出生地スルチンは民政に移行していた。

スルチン村も含む6つの集落からなるスルチン地区 satnija は、1746年のマリア・テレジアの勅令によりスラヴォニア軍政国境地帯に組み込まれた。地区全体の当時の人口は725戸、5128人であり、正教徒が4712人、カトリックが

²⁸ Sima M. Ćirković, *The Serbs*, Blackwell Publishing, MA, Oxford and Victoria, 2004, pp. 200-202

²⁹ オーストリアの歴史家カーザーの表現。カール・カーザー、越村勲・戸谷浩編訳『ハプスブルク軍政国境の社会史——自由農民にして兵士』学術出版会、2013年を参照。

328人、ルター派が48人であった³⁰。スルチンは18世紀の前半に急速に人々の移住が進み、セルビア正教会の教区が整えられた。正教会の登記簿によると、1746年にスルチン村だけで、134戸、800人³¹が、トドロヴィチが生まれた頃の1878年には、200戸（うち、180戸は夫妻と家族）、1034³²人が暮らしていた。1871年に、スルチン地区を含むスレム全体が軍政国境地帯から外れ、1881年にはスレム地方行政の再編により、スルチンはゼムン郡 kotar に組み込まれ、商業や農業活動が進展することになる。19世紀末から20世紀初頭のこの地方の社会状況、トドロヴィチ家がどこからスルチンに移住してきたのかは興味深い³³、今後の課題としたい。

トドロヴィチはハプスブルク帝国の辺境地域にセルビア人として生まれ、サヴァ川の対岸にあるセルビア王国の首都ベオグラードのギムナジウムに進学し、ベオグラード高等専門学校に進んだ。前述したベオグラード高等専門学校の入学届けには、国籍をセルビアとしていることから考えて、この頃にはベオグラードに家族で移住していた可能性もある。いずれにせよ、帝国の首都ウィーンではなく、ベオグラードに進学したのは、トドロヴィチ家の経済状況や距離の近さから考えて当然の選択だったのであろう。

2. ロシア語教師として

前述したように、ベオグラード大学工学部を一年修了したあと、トドロヴィチが1894年にロシア政府留学生としてペテルブルク大学に留学してから、1909年4月に来日するまでの時期の足跡についてはほとんど資料がない。その時期を知る手がかりの一つであるヴケリッチの記事³⁴には、トドロヴィチはペテルブルク大学で物理と数学の博士号を取得した頃、妻のカテリーナと知り合い、結婚してロシアで10年ほど暮らしたと記されている。ここには、二人が出会った年や場所が書かれていないので詳細は定かではないが、柴理子がふれているとおり、カテリーナはトドロヴィチと出会う前に、ヨセフ・コーガンという人物と結婚し、1902年9月に長男ヤコブをもうけている³⁵。他方、トドロヴィチも現在のところ特定できていないが、おそらくセルビア人女性と結婚し、1902年

³⁰ Marko Kljajić, *Surčin kroz povijest*, Petrovaradin, 2010, 54.

³¹ *Ibid.*, 264

³² *Ibid.*, 268

³³ スルチンの聖ペトカ正教会には、18世紀末以後の出生、結婚、死亡の登記簿 *матрикула* が残されているが、正教徒であるトドロヴィチが生まれた1875年頃の登記簿は焼失か紛失か不明だが、見つけれなかった。

³⁴ 山崎洋編訳、前掲書、120ページ。

³⁵ 柴理子、前掲論文、7ページ。

10月に長男ヴァレリアン、1904年5月に次男ドラグティンが生まれている。トドロヴィチもカテリーナも子連れ同士の再婚だったわけで、この事実をあまり公表したくなかったのかもしれない。

カリフォルニア州に住むドラグティンの息子ダイナ氏によると、ヴァレリアンもドラグティンも生まれはユーゴスラヴィア(セルビア)のニシュだという。しかし、先に述べたように、ニシュの歴史文書館でかれらの出生地がニシュであることを確認することはできなかった。1905年前後に、トドロヴィチとカテリーナが出会ったと推測できるが、二人の出会いはペテルブルクだったのか、カテリーナの暮らしていたロシア帝国の辺境地ベッサラビアのキリヤだったのか、なにが二人を結びつけたのかについてはまったく手がかりがない。

トドロヴィチがペテルブルク大学に留学した当時の生活について、本人が書いた文章を見つけることはできないが、最近、モスクワの中央文書局とベオグラードのセルビア文書館が共同で編集した、ロシアとセルビアの関係(1878-1917年)についての3巻本の史料集が出版され、社会・政治・文化関係を扱っている第3巻に、トドロヴィチの2年後の1896年、ペテルブルク大学医学部に留学したセルビア人学生の書簡が収められている。そこから、当時の留学生の生活の一端を垣間見ることができる。この留学生モムチロ・イヴコヴィチは知人に宛てて、次のように書いている³⁶。

こちらに来てから、もう二カ月以上過ぎてしまいましたが、連絡することさえできませんでした。私を悪く思わないでください。手紙を書こうとする時に限って、いつも書けなくなってしまいます。だれかに邪魔をされてしまうか、誰かの相手をするようになるからです。……自分の時間などまったくとれず、一瞬たりとも自由な時間がないと言っても過言ではありません。朝、部屋を出て実習に向かい、夜8時頃に帰宅します。その後、10時から深夜の3時頃まで文献で学ぶのが日常です。

これは医学生の場合だが、トドロヴィチも猛勉強を続けて大学を卒業し、さらに物理・数学の学位を取得したのであろうことは容易に想像できる。

学位取得後のトドロヴィチの経歴について、本人が祝賀会のスピーチのなかでふれる機会はあった。1935年11月30日、トドロヴィチの東京外国語学校在職25年を記念する祝賀会が、上野精養軒で行われた。ヴケリッチもこの祝賀会

³⁶ «Писмо српског студента у Петрограду М. Ивковића новинару и књижевнику Р. Одавићу, о студентском животу у Русији, словенофилским круговима и предабању о Србији студента В.Н. Корабљова», *Москва-Србија Београд-Русија: Документа и материјали, том 3 (Друштвено-политичке и културне везе 1878-1917)*, Москва-Београд, 2012, 550-551.

に招待されており、出席者は総勢で 50 名を越えた³⁷。出席者のスピーチは、ほとんどがロシア語でおこなわれていて驚かされる。祝賀会の最後に、トドロヴィチが謝辞を述べ、このスピーチはトドロヴィチのロシア語による略歴とともに東京外語露西亜会の『会報』に掲載されている³⁸。トドロヴィチ自身が書いたと思われるこの略歴には年月日がつけられていないため、正確な時期を知ることにはできないが、それによるとペテルブルク大学物理・数学学部を終了したあと、大学に残り物理・数学の博士号を取得した。その後、7 年間にわたり種々の学校で物理と数学を教えるうちに、極東の生活に関心を持ち始め、ハバロフスクに設置されたロシア政府のプリアムール税務局の官吏として 3 年間勤務した。官吏として勤務できたことを考えると、トドロヴィチはこれ以前の時期にロシア帝国の国籍を取得していたものと思われるが、いつの時点で取得したのか確認できていない。また、ハバロフスクでの生活がどのようなものであったのか興味を引かれる。とくに、ロシア帝国の南部辺境地生まれのカテリーナにとって、極東の厳しく長い冬が続くハバロフスクでの生活については、想像をめぐらす以外にない。

トドロヴィチが家族で移り住んだ 1907 年当時のハバロフスクは、1880 年代からここに居留するようになった日本人が、日露戦争（1904 - 05 年）で帰国してしまい、戦争が終結してようやく戻って来るようになっていた。300 人ほどの日本人が居留地を形成していたようである。略歴には、話にきく同じ極東の地の日本に興味を引かれ、日本への移住を望むようになったと書かれている³⁹。1907 年 12 月には、トドロヴィチ夫妻のあいだに、ハバロフスクで初めての男児ヴィクトルが生まれる。4 人の男の子をかかえ、まったく見ず知らずの国に行こうとする二人には、国境を楽々と超えてしまう力強さを感じざるを得ない。ハバロフスク帝国とロシア帝国の辺境地に生まれた夫妻にとって、国や言葉の違いなどあまり問題にならなかったのかもしれない。

ともかく、トドロヴィチ夫妻がハバロフスクから来日するのは 1909 年 4 月 15 日なので、ここから逆算すると 1899 年頃に学位を取得し⁴⁰、1906 年頃まで

³⁷ 溝部壽六「トドロヴィチ先生勤続 25 年祝賀会記事」『會報』第 21 号、1935 年 12 月、42 ページ。

³⁸ Прощальная речь проф. Д.Н.Тодоловича, 『會報』第 21 号、1935 年 12 月、20-27 ページ。

³⁹ Краткие сведения из жизни проф. Д.Н.Тодоровича, 『會報』第 21 号、1935 年 12 月、27 ページ。

⁴⁰ トドロヴィチは、日本滞在中に日本赤十字社を通じて多大な貢献をしたとの理由で、1959 年 7 月に、日本赤十字社から金色有功章を授与された。この記念祝賀会が 9 月に カリフォルニア州のバークレーで開催された。当時、カテリーナの息子ジェームスの妻がバークレーの赤十字社支援会の会長を務めていたようで、日本赤十字社から表彰された初のアメリカ人（トドロヴィチは、1945 年にアメリカの市民権を取得）として、バークレーの地方紙に記事が掲載された。この記事では、1898 年に学位を取得したと紹介されている。

はロシアで生活していたことになる。しかし、先にふれたように、トドロヴィチは1902年に長男をもうけているので、これ以前にセルビア人女性と結婚したと考えるのが妥当であろう。初婚の相手にどこで会い、どこで生活していたのだろうか。略歴には学位取得後、種々の学校で7年間教鞭に立ったとしか記されていないが、31年におよぶ東京外国語学校を定年退職する際、1940年5月12日に東京丸の内のレストラン「永楽クラブ」で催された送別会のスピーチでは、ロシアで7年間教えたと述べている⁴¹。

トドロヴィチの初婚の相手についての情報も得られていないが、セルビア人女性だとすると、トドロヴィチはペテルブルクでの留学を終えて、一時的にセルビアに戻っていたのだろうか。このように推測すると、彼の略歴やスピーチには隠された事情があったと考えざるを得ない。ドゥシャン・トドロヴィチという姓名は、セルビアでは珍しいものではないので、同姓同名ということもありうるが、興味深い資料がある。先に引用した学生の手紙が収められた本の巻末に、外交、軍事、教育分野での人物往来の一覧表が載っている。一覧表の「III ロシア帝国での研究のために派遣されたセルビア政府奨学生、ロシア帝国に受け入れられた陸軍省士官候補」に、ドゥシャン・トドロヴィチの名を見つけることができる。このトドロヴィチは砲兵隊の所属で階級は少尉(kapetan II klase)、1903年にロシアの砲兵隊射撃学校に派遣された⁴²。

トドロヴィチが一時、セルビア陸軍の軍人であったことをうかがわせる写真が手元にある。撮影日も場所もわからないが、ダイナ氏から入手した2枚の写真がそれである。一枚は、トドロヴィチを含む軍服(制服)姿の4人と平服の二人の男の6人で撮った記念写真(写真1を参照)であり、もう一枚はトドロヴィチが軍服(制服)姿で、健康そのものの男児を肩車し、うれしそうに微笑んでいる写真である(写真2を参照)。男児の容姿からして一歳位に見えるので、この男児が長男のヴァレリアンであれば、写真が撮影されたのは1903年頃、二男のドラグティンであれば1905年頃であろう。ダイナ氏が言っていたことからすると、撮影場所はニシュなのかもしれない。当時、セルビア王国の軍制⁴³が整備され、徴兵制がとられていたので、トドロヴィチが徴兵義務を果たすため一時帰国して、セルビア陸軍に属していた可能性はあるが、現在は推測の域を脱することができない⁴⁴。

‘Japanese Red Cross Honors Dr. D. N. Todorovic at Berkeley Ceremonies’, *Berkeley Daily Gazette*, September 23, 1959.

⁴¹ Прощалина реч проф. Д.Н.Тодоловича, 『會報』第30号、1940年7月、21ページ。

⁴² Москва-Србија Београд-Русија: Документа и материјали, том 3, 666.

⁴³ セルビア王国の徴兵制度については、以下を参照。Милић Милићевић, «Регрутни састав војске Србије 1883-1912.: Систем позива и неки његови друштвени аспекти», *Војно-Историјски Гласник*, 1/2016, 9-25.

⁴⁴ 2017年9月14日、セルビア公文書館のサーシャ・ルジェスコヴィチ(セルビア軍の軍

謎の多い7年間の物理・数学の教員生活のあいだに、柴理子論文が推察⁴⁵するように、1905年前後にカテリーナと出会い結婚したあと、ハバロフスクに移り住んだトドロヴィチが、どのような経緯でロシア語教師として日本に来ることになったのかについて、乏しい手掛かりをもとに考察してみる。ヴェリツチの記事には、日本政府の招きで東京の士官学校の教官となり、その後、東京外国語学校の教員に任じられたとされる⁴⁶。しかし、トドロヴィチの東京外国語学校露語科の同僚である八杉貞利が、トドロヴィチの東京外国語学校在職25年記念の祝賀会においてロシア語で披露したかれの赴任の経緯を読むと、事情は異なっている。トドロヴィチの前任のロシア語教師ペトロフの契約が切れ、1909年に離任する際、ペトロフが後任を推薦するとのことであつたが、なかなか人選が進まなかった。そこで、八杉はウラジオストクに住む知人のクシミドフに人選を依頼した。当時、東京外国語学校がウラジオストクに1899年に設置された極東ロシア最初の大学である東洋学院⁴⁷から毎年、日本語専攻の学生を受け入れており、かれはその一人であつた。帰国後も、八杉と親しく交信していた。八杉の依頼を受けて、クシミドフが適任者を探し、推薦したのがハバロフスクに住むトドロヴィチだつた⁴⁸。

そもそも、日本のロシア語教育は、1894年(明治27年)の日清戦争での勝利後に本格化する。日本が中国大陸への進出を果たそうとすれば、満州や朝鮮の利権をめぐるロシアと対立することが明白であつた。こうした状況のもと、国立の外国語学校の再編成が行われ、1897年(明治30年)に英、仏、独、露、清、韓の6語科(1899年には伊語科を増設)で東京外国語学校が発足した。この年には、陸軍幼年学校でロシア語が正課とされた。1900年から、ロシア語科にロシア人教師が正式に採用され、日露戦争が始まる1904年の一時期を除き、トドロヴィチへと続くことになる⁴⁹。

八杉のスピーチにもどると、クシミドフがトドロヴィチを推薦した書簡の一

服・制服の研究者)氏にこの写真を見てもらい、その場で意見を聞いた。彼の見解では、トドロヴィチが着ているのは、セルビア軍の軍服でも役人の制服でもなく、ロシア帝国の役人の制服であろうとのことであつた。この写真の検証は今後の課題である。

⁴⁵ 柴理子、前掲論文、8ページ。

⁴⁶ 山崎洋編訳、前掲書、120ページ。

⁴⁷ 東洋学院については、以下を参照。生田美智子「東洋学院物語——極東における日露言語文化交流の拠点」『セーヴェル』(ハルビン・ウラジオストクを語る会)第9号、1999年6月、67—88ページ、;生田美智子「東洋学院物語②」『セーヴェル』第10号、1999年12月、34—62ページ;A. ディボフスキー「極東ロシアにおける日本研究日本語教育の行方——東洋学院(1899—1920)の日本学を中心に」『言語文化研究』(大阪大学)35号、2009年3月、95—117ページ。

⁴⁸ 「祝宴に於けるテーブルスピーチの二(八杉貞利氏)」『會報』第21号、1935年12月、9ページ。

⁴⁹ 『東京外国語大学史』、795—799ページ。

節を紹介している。そこには、トドロヴィチは現在、ハバロフスクのロシア政府の官吏であるが、日本のロシア語学科で教えることを望んでいること、最高学歴を持つ人物で、誠実、実直、勤勉であり、教歴も有しており、東京外国語学校の教員として適任であることなどが書かれている。そして、トドロヴィチの最大の長所は酒好きでないことだと結んでいる。八杉はクシミドフがあえて最後に「酒を飲まない」と書いたのは、前任者のペトロフが学校の業務に差し支えることはなかったが、酒好きだったことを伝え聞いていたのだろうと述べている⁵⁰。酒を飲まないことがトドロヴィチ採用の決定打だったようで、ロシア語のネイティブではなく、セルビア人であることが問題とされた様子は見られない。

こうして、トドロヴィチの言葉を借りると、浦島太郎のように「ホザン丸」という海亀に乗り、雪に閉ざされた暗いシベリアの陸地から、暴風雨の日本海に船出し、日出ずる帝国にやってきた⁵¹。1909年(明治42年)4月15日、八杉が出迎える新橋に降り立った時、東京は桜の花が舞い散っていた。トドロヴィチはこの日から、東京外国語学校ロシア語科に採用された⁵²。東京外国語学校では、1900年から外国人教師を採用したが、いずれも2、3年の雇用期間が切れると帰国してしまった。トドロヴィチはこの後、定年を迎えるまで31年間もロシア語教師として滞在することになる。前任者のペトロフが兼任していた陸軍士官学校のロシア語教師として任用されるのは同年9月1日であり⁵³、1912年まで2年半にわたり陸軍士官学校にも出講した⁵⁴。

3. 第一次世界大戦と塞国(セルビア)救難会の活動

トドロヴィチ夫妻は1907年にハバロフスクで二人のあいだに生れた男児ヴィクトルのほか、トドロヴィチの二人の息子(当時、7歳と5歳)、妻カテリーナの一人息子(当時、7歳)の6人で、異国の地での生活を始めた。トドロヴィチはロシア語教師として、カテリーナも在東京のロシア大使館の支援を受け、幸運にも恵まれて、来日早々にピアニストとしてコンサート活動を始めること

⁵⁰ 「祝宴に於けるテーブルスピーチの二(八杉貞利氏)」『會報』第21号、1935年12月、9-10ページ。

⁵¹ 「祝宴に於けるトドロヴィチ先生の御挨拶」『會報』第21号、1935年12月、21-22ページ。

⁵² JACAR(アジア歴史資料センター、以下JACARとする)Ref. A10113356400、叙勲裁可書・昭和15年・叙勲巻20・外国人1(国立公文書館)。

⁵³ 『陸軍士官学校 明治42年歴誌』第4巻、防衛省防衛研究所。

⁵⁴ JACAR Ref. C06085149700、士官学校外国語教師外国人接待の件、明治45年3月9日(防衛省防衛研究所)

ができた⁵⁵。時代は明治から大正へと変化しようとしていたが、東京での生活は順調であった（写真3を参照）。

東京外国語学校着任当時のトドロヴィチの様子や交友関係を知る手掛かりはなかったが、その一端にふれる資料を入手する幸運に恵まれた。2017年9月初め、チェコ共和国のカレル大学中東・アフリカ研究所で中世イスラーム諸国史研究をしているジェンカ Josef Ženka さんからメール連絡があった。まったく面識のない研究者からのメールには、チェコ人言語学者ニクル Alois Richard Nykl⁵⁶の業績の整理と目録作成の過程で、日本滞在中の友人トドロヴィチ関連の書簡類も4ファイルにまとめ、プラハにあるアジア・アフリカ・アメリカ文化のためのナールステク博物館にニクル文書として置いてあるが、トドロヴィチ関連のファイルは必要かと書かれていた。4ファイルの簡単な一覧表が添えられていた。ジェンカさんは、前述の「アンセストリー・コム」の掲示板でトドロヴィチの親族を探す私のメールを見つけたとのことだった。

ファイルを送ってほしいとの私の依頼に応じて、ジェンカさんはトドロヴィチ関連のファイルを送ってくれた。ファイルはニクルが横浜滞在時に書いたトドロヴィチとセルビアに関する日記（英語が中心）、トドロヴィチからニクルへの書簡（ロシア語）、トドロヴィチの二男ドラグティンとニクルの書簡（英語）が中心だが、数枚の写真も入っていた。そのなかで目を引くのはインド人の汎イスラーム主義者のバラカトゥッラー（1854-1927年）であり、英字雑誌『イスラーム同胞 Islamic Fraternity』とともに本人が写っている写真（写真4を参照）の下にトドロヴィチに宛てて、1912-1913年の新年の挨拶が英語で書かれている。

なぜ、ニクルがこの写真を所有していたのだろうか。バラカトゥッラーは東京外国語学校のヒンディー語教師として、トドロヴィチと同じく1909年に着任

⁵⁵ 柴 理子、前掲論文、9-10ページ。

⁵⁶ Josef Zenka, 'Alois Richard Nykl and the Naprstek Museum', *Annals of the Naprstek Museum*, 35/2, 2014, pp.57-80. それによると、ニクル（1885-1958年）は南ボヘミア生まれだが、旅行家としても知られており、チェコ語のほか英語、ドイツ語、スペイン語、フランス語、イタリア語、アラビア語、日本語、ポルトガル語を駆使することができるポリグロット。横浜には1911年から16年まで滞在し、その後アメリカにわたり、シカゴ大学教授として言語学を講じた。コーランをアラビア語からチェコ語に翻訳した人物だったが、チェコではほぼ無名のアメリカ人言語学者だったようである。来日直後のニクルの様子は、吉澤裕子『フク・ホロヴァーの生涯を追って——ボヘミアに生きた明治の女』草思社、2002年、98-108ページに描かれている。それによると、アジアの旅で金を使い果たしたニクルは日本に着くとすぐに、横浜でチェコ人二人が経営する「レツル・アンド・ホラ合資会社」のホラのもとに職を求めてやってきた。もう一人のレツルは、広島県物産陳列館（原爆ドーム）の設計者である。この時期、レツルはホラと組んで設計に携わっていた。ハプスブルク帝国のチェコ人たちは、第一次世界大戦期には「敵国人」としての生活を余儀なくされながら、助け合って暮らしていたことがわかる。

した。東京外国語大学の大学史によると、バラカトゥッラーはヒンディー語学科二人目のインド人講師であり、1914年まで教鞭に立った。反英独立運動の活動家として知られた人物だが、その教師像は明らかでない⁵⁷。1911年に来日したニクルはコーランのチェコ語への翻訳者であったことからして、イスラーム教について多大な関心を持っていたことは容易に想像できる。両者は日本で親交を深めたものと思われる。バラカトゥッラーとトドロヴィチは東京外国語学校の同僚だったことから知り合い、トドロヴィチは彼を通じて、チェコ人のニクルを紹介された可能性が強い。しかし、トドロヴィチが汎イスラーム主義の活動に関心を示した様子は見られない⁵⁸。

一方、この時期、トドロヴィチの母国セルビアはまさに戦争の時代を迎えていた。オスマン帝国からの独立を達成したバルカン諸国はロシアを後ろ盾として、対立する相互の領土的な野心を一時的に凍結して二国間の同盟をつぎつぎに築き、1912年10月にオスマン帝国との戦争を始めた。この第一次バルカン戦争でオスマン帝国は敗北し、400年以上の長期にわたるバルカン支配が終息した。帝国軍は首都イスタンブル周辺の一部地域を除き、バルカン半島から撤退した。この直後、権力の空白地帯となったマケドニアの領有をめぐり、今度はブルガリアとセルビア、ギリシアとの対立が表面化し、13年6月にバルカン諸国間の戦争が生じた。この第二次バルカン戦争は一カ月も経たないうちに、ブルガリアが敗北して終わった。

二度にわたる戦争で、バルカン諸国はそれぞれ多大な犠牲を被った。戦勝国となったものの、セルビアは第一次バルカン戦争で死者5千人、負傷者1万8千人、第2次バルカン戦争(ブルガリアとの戦争)で死者7-8千人、負傷者3万人、これに加えて1万人以上のコレラなどによる病死者を出した⁵⁹。人的な犠牲を払ったうえで、セルビアは1878年の独立王国の承認以後求めてきた、中世セルビア王国の中心地であったコソヴォ、ノヴィ・パザル周辺のサンジャク地方、スコピエを含むマケドニア北部地方を領有することになった。しかし、

⁵⁷ 『東京外国語大学史』東京外国語大学、1999年、1076ページ。

⁵⁸ ロシア帝国生まれのトルコ人・ムスリム活動家イブラヒムも1909年に来日している。イブラヒムは東京でバラカトゥッラーと親交を結び、日本のアジア主義者に「イスラーム世界」の意義を伝えた。小松久男『イブラヒム、日本への旅——ロシア・オスマン帝国・日本』刀水書房、2008年を参照。

⁵⁹ 死傷者数は、アメリカのカーネギー財団が組織した専門家によるバルカン戦争視察団の報告書による。クリスティナ・クルリ総括責任、柴宜弘監修『バルカンの歴史——バルカン近現代史の共通教材』明石書店、2013年、383ページ。原著は、International Commission to Inquire into the Causes and Conduct of the Balkan Wars; Carnegie Endowment for International Peace. Division of Intercourse and Education, *Report of International Commission to Inquire into the Causes and Conduct of the Balkan Wars*, Washington, D.C., 1914, pp. 395-397で、戦費についても詳細な報告がなされている。

軍事的な勝利による領土の拡大はセルビア人居住地の解放（「大セルビア主義」）という政治的な目的を逸脱するものであり、立憲君主国のなかで軍部の役割を肥大化させることにもなった。とくに、軍の一部の将校が議会制民主主義に反する軍事支配を目指す秘密結社「統一か死か」（通称、「黒手組」）を結成して、「大セルビア主義」の実現に向かった。こうして、国王（摂政）、政府、軍部の確執は第一次世界大戦の終結時まで続いた⁶⁰。

日清戦争と日露戦争の勝利で勢いづいた日本の軍部が軍拡要求を続けたのと状況は類似していたと言える。1914年6月28日にハプスブルク帝国のフランツ・フェルディナント大公夫妻が殺害されたサラエヴォ事件後、ハプスブルク帝国はドイツとの協議を重ねた末、大公夫妻暗殺事件へのセルビアの関与をめぐる捜査に参画することを要求する10項目の最後通告を突きつけた。パシッチを首相とするセルビア政府は国家主権を侵害する1項目を除いて受け入れたが、ハプスブルク帝国は7月28日に、セルビアに対して宣戦を布告した。こうして第一次世界大戦が開始された。「統一か死か」の軍人たちや世論は開戦に沸いた。しかし、セルビア政府は公的に暗殺事件を非難し、戦争を回避しようと試みた。バルカン戦争で疲弊したセルビアにとって、ハプスブルク帝国と戦う余力は乏しかったからである。加えて、ハプスブルク帝国には200万近くのセルビア人が居住しており、彼らと戦火を交えなければならないことにためらいもあった。一方、ハプスブルク帝国は帝国内のセルビア人兵士をセルビアとの戦線に投入することはしないで、クロアチア人とムスリム兵士を送り込んだ⁶¹。

セルビアの国外で戦われたバルカン戦争とは異なり、この戦争はハプスブルク帝国との長い国境地帯が戦場となったので、当然ながらセルビアの被害は甚大だった。戦後のパリ講和会議（1919年1月）に、南スラヴの統一国家セルビア人・クロアチア人・スロヴェニア人王国（1919年にユーゴスラヴィア王国と改称）の代表団が提出した報告書によると、第一次世界大戦によるセルビアの死者数は124万7千人、そのうち軍人は40万2千人（兵力は85万2千人）、民間人は84万5千人であった。1914年の総人口の実に28%が命を落としている⁶²。

トドロヴィチは、バルカン戦争から第一次世界大戦へと戦火が続く、遠く離れたセルビアの状況に心を痛めていたようである。注24で引用した1914年（大正3年）10月4日の『東京朝日新聞』朝刊によると、開戦直後のこの時期に、トドロヴィチが日本赤十字社に問い合わせをした事情は以下のようなものである。

⁶⁰ Ćirković, *op. cit.*, pp.245-246.

⁶¹ *Ibid.*, pp.247-248.

⁶² *Лексикон Првог светског рата у Србији* [第一次世界大戦事典], Институт за савремену историју и Друштво историчара Србије, Београд, 2015, 13, 360.

東京外国語学校教師トドロヴィチ氏は^{セルビア}塞國生まれの露國人であるが今回日本赤十字社から塞國赤十字社に寄贈する包帯材料の目的を以って寄附金をしたいと云ふ問合の書面先月二十八日に花房赤十字社長の許まで送って来た。日本赤十字社は欣然其の希望に応ずる旨二十九日に回答した處此一日に至ってト氏から一百五十圓を送って来た。同社は直ちに巻軸包帯一千巻を増加し一見ト氏の寄贈と云ふことを解るやうに同社の寄贈品の間に籠めて荷造りして塞國赤十字社に向けて発送する事になった。ト氏曰く「私は十八の年まで塞國で育ったが其年から露國に移住し今から五年半前に外国語学校の招聘に依って日本に来了。獨逸二國は塞國の敵であり又露國の敵である為に今度の戦争は二重の深い感激を私に与へた。私は日本赤十字社が塞國赤十字社の請願を快く容れ包帯材料を寄贈すると云ふ事を聞いて義侠的な日本の立派な態度に就いて深く感動した。私は只黙して座視するに忍びなくなった。せめて一卷の余計な包帯なりとも私の志の一片として送ってやりたいと扱こそ今度の寄附をしたのである…⁶³。

このように、日本赤十字社は1914年10月に包帯材料をセルビア赤十字社に寄贈した際、トドロヴィチが寄付した私財150円分の包帯材料も含めて送った。当時、激しい戦闘が繰り返されるなかで、ハプスブルク帝国との国境沿いに位置していたセルビアの首都ベオグラードは敵の攻撃を受けやすく、首都としての機能を南部のニシュに移していた。1915年3月25日付で、セルビア赤十字社副社長のスポティチ中佐 Dr.Vojislav Subotić が日本赤十字社とトドロヴィチに礼状を送付したのは、このニシュからであった。前述したトドロヴィチの孫にあたるデイナ氏が、日本赤十字社社長とトドロヴィチ宛ての礼状のオリジナルを保管しており、それらを参照することができた⁶⁴。スポティチ中佐はトドロヴィチ宛ての書簡のなかで、セルビアの窮状を訴え、アメリカ、イギリス、フランスでは赤十字社を通じて、セルビア救済の義援金募集活動が展開されていることにふれ、15ページにわたるセルビアの紹介文を同封して、義援金、医薬品、衣類、とくに下着やベッドのシーツなどの必要性を述べている。

トドロヴィチはこの礼状を5月に受け取ると、すぐにセルビア赤十字社の要請に応じて、マレフスキー駐日ロシア大使と協議して、ロシア帝国皇后および皇太后付女官であった大使の令嬢エフゲニヤとトドロヴィチが呼びかけ人（主

⁶³ 「感激の包帯費——赤十字に寄附した塞國生まれの露國人」『東京朝日新聞』1914年10月4日付朝刊。

⁶⁴ Председнику Јапанског Црвеног крста Г. Председниће, Српско друштво Црвенога крста, 25. марта 1915, Београд; Поштовани и други господине професоре, Српско друштво Црвенога крста, No.3027, 25.марта 1915, Ниш.

唱者)となり、塞國救難会を設立して義援金の募集活動を始めることになった⁶⁵。賛助者に名を連ねているのは、鍋島榮子侯爵夫人、小笠原貞子伯爵夫人、花房千鶴子子爵夫人、小澤桑子男爵夫人、伊東満里子男爵夫人、それにカテリーナ夫人の6名であり、トドロヴィチは幹事も務めた。ここから、トドロヴィチ夫妻がロシア大使と懇意だったことが窺われる。また、賛助者はすべて華族夫人であり、その多くは、カテリーナ夫人が華族の令嬢にピアノを教えることを通じて知り合った人たちであろうと推測される⁶⁶。

塞國救難会の設立と義援金募集の知らせは、セルビア赤十字社のスポティチ副社長の紹介文の翻訳とともに、「塞國救難義損募集に就いて」という表題で、日本赤十字社の機関誌『博愛』に掲載された⁶⁷。ここには、先にふれたような全土が戦場となったセルビアの惨状が次のように述べられている。

…セルビア人の勇敢と四年間に亘る戦争に於いて敵を撃破せしこととは、世人の賞讃措かざる所なるも、此の尚武の小國の惨状言語に絶せり。目下傷病者は國內に満ち、病院となく官衛となく又個人の家屋すら傷病兵を収容し、セルビア全土を挙げて一大病院、一大墓地の如き觀を呈せり。武器を執りて戦場に立ち能はざる者は悉く病兵の看護に服するも尚不足を告げ加之家屋不足の爲の病者の身を容るべき所なし、畜に家屋のみならず寝臺なく敷蒲團なき爲の負傷者と傳染病者と相混じて藁の上に呻吟す。又敷布なく病者を蔽ふに毛布(掛蒲團)なく、襯衣なし、醫師マルコウイチの言に依れば「大施術を受けたる負傷者は着替なき爲三ヶ月間一枚の襯衣を纏ひつつあり」と。又藥品缺乏の爲傷病兵を治療するに由なく彼等は恰も蒼蠅の如く斃死す。…加ふるに俘虜の奥國兵十萬に餘り、又避難者の入り来る者尠なからず、後者は奥國に國籍を有するも虐殺又は奥國官憲の迫害を怖れて避難せるスラヴ民族なり。就中最も悲惨なるはセルビア民なり。如何となれば彼等は先ず傷病兵俘虜避難者を勞はり、然る後自己の事を慮るを常とすればなり。特に目下苦しみつつあるは奥軍の傳播せし傳染病是なり。之が爲消毒藥缺乏し、獨り住民のみならず醫師も亦其慘禍を蒙りつつあり⁶⁸。…

トドロヴィチを中心として東京で塞國救難会が設立されたあと、セルビアの

⁶⁵ 「塞國政府の謝意」『博愛』354号、1916年10月、36ページ。

⁶⁶ 柴 理子、前掲論文、21ページ。

⁶⁷ 「塞國救難義損募集に就いて」『博愛』340号、1915年8月、4-9ページ。「塞國救難義損金募集」という表題で、同じ内容のビラが出されていたようで、これはセルビア文書館に残されている。Архив Србије, Црвени крст Србије, 11-1.tif, 1915. ここから、塞國救難会が1915年6月頃に設立されたことは推測できるが、正確な時期は特定できない。

⁶⁸ 同上、8-9ページ。

戦況はさらに悪化した。1915年10月に、隣国ブルガリアが中央同盟側に立って参戦すると、ハプスブルク帝国軍とブルガリア軍がセルビアへの攻撃を強めた。すでにニシュに移転していたセルビア政府は、議会や軍や多数の民間人の総勢14万人⁶⁹とともに、セルビアの地を離れなければならなくなった。1915年から16年の真冬の時期であり、南のコソヴォへ、そしてモンテネグロとアルバニアの道なき山岳地を逃げ、イタリア統治下のアルバニア北部の港から主としてフランス籍の船に乗り、南部のヴローラや協商国側が管理していたギリシアのコルフ島に渡った。「アルバニアのゴルゴタ」と称される苦難を生き延びたセルビア軍の兵士たちは、さらに激戦の続いていたテッサロニキ戦線へ赴いた。セルビアの民間人は協商国軍に保護され、フランス、イタリア、スイス、北アフリカの収容所に送られた。就学中であった生徒たちの多くは、フランスで学業を続けることになる。セルビア政府と議会はコルフ島に、摂政アレクサンダル公とセルビア軍はテッサロニキで活動を続けた⁷⁰。

日本赤十字社を通じての塞國救難会への義援金募集(一口10銭)は全国的な広がりを見せ、1915年11月末までに累計4550円64銭に達した⁷¹。一方、トドロヴィチは精力的にセルビア救済のための講演活動を行った。その様子は、当時の新聞に伝えられている。10月23日、帝国ホテルでトドロヴィチの慈善講演会が開催された。この時期に、世界各国を歴訪するフランス政府の外交使節団が来日していて、その一員である著名なフランスの作家でジャーナリスト **Hugues Le Roux** が司会を務めた。ロシア大使、イタリア大使など協商国側の外交官が100人以上出席するなか、トドロヴィチは幻灯(スライド)45枚を使って、セルビア建国の歴史、教育、宗教、そして現状などについて英語で講演を行った。とくに、ベオグラードに住む母親からの手紙を引用した際、聴衆はその惨状に愕然とした。1915年の時期不明のこの手紙には、父親の痛ましい死にいたる様子が綴られていたからである。それによると、ハプスブルク帝国の軍隊がベオグラードを占領した時、両親は80歳を超えており、父親は病気で寝たきりだったため、ベオグラードを離れることができず自宅にとどまっていた。ある日の夕方、10人のハンガリー人兵士が両親の家に押し入り、ワインを求めてきた。母親は老人家庭でワインはないとことを説明して、隣家に聞いてみることを申し出た。20分間の猶予をもらい、隣家に行った。隣人から5リットルのワインを譲り受けて家に戻ると、この間に、兵士たちは父親の寝ていたベッドも含め室内を物色したようで、父親は床に転げ落ちていた。この事件が契機

⁶⁹ Душан Т. Батаковић (ред.), *Нова историја Српског народа* [セルビア民族近代史], Наш дом, Београд, 2000, 259.

⁷⁰ Ćirković, *op. cit.*, pp.248-250.

⁷¹ 「塞國救難義捐——催された慈善講演會」『博愛』344号、1915年12月、24ページ。

となって、父親は 81 年の生涯を閉じたとのことであった⁷²。

トドロヴィチがこのような悲惨な個人的体験を含めてセルビアの惨状を語った講演会の会場では、トドロヴィチ夫妻の息子たちが義援金を集め、総計 200 円がセルビア赤十字社に送られることになった⁷³。また、1916 年 2 月 3 日には、塞國救難会の主催により 5 日に神田青年会館でセルビアおよびセルビア国民について、トドロヴィチが幻灯を使って慈善講演会を行う旨を知らせる「べた記事」が掲載されている⁷⁴。この講演会は一般向けだったようで、通訳付きと書かれているが、ロシア語を用いたのか、英語による講演会だったのか定かではない。

塞國救難会が呼びかけた義援金をもとにして、シャツ、ズボン下、タオル、シーツ、綿入り衣類、フランネル衣類、毛布、ビスケット、茶、ガーゼ、綿、包帯などが、1915 年の年末にロンドン駐在のセルビア公使宛てに送られた。この際、日本郵船の好意で、郵送費が無料であったと、トドロヴィチは述べている⁷⁵。一方、義援金の送付は、1916 年 7 月初めに行われた。総額は 5562 円 60 銭にもおよび、これもロンドン駐在のセルビア公使宛てに発送され、セルビア赤十字社に転送を依頼した。7 月 8 日、ロンドン駐在のボシュコヴィチ Bošković 公使からトドロヴィチ宛てに謝意を記した電報が届いた⁷⁶。トドロヴィチはまるでセルビアの「民間大使」のように活動し、「セルビア国民を代表して」日本赤十字社に謝意を伝えている。例えば、1917 年 4 月に日本赤十字社の石黒社長に面会し、6 月（実際には 8 月に延期）に発送予定の包帯材料、医薬品、医療器具などの寄贈に対して感謝の意を伝えた⁷⁷。

トドロヴィチがセルビアの「民間大使」の役割を果たしていたことは、ロンドン駐在のヨヴァノヴィチ Jovan Jovanović Pižon・セルビア公使が珍田捨巳・駐英大使に「官憲認許」のあることを伝えていることから窺える⁷⁸。セルビア

⁷² ‘Not wanted: Austrian Kultur effects in Serbia’, *Japan Times*, October 24, 1915; ‘Austrian “Kultur”’: Prof. Todorovitch receives interesting letters’, *Japan times*, October 27, 1915. 父親が死去したあと、注 26 でふれたように、妹ミルカが母親ユルカと同居した。姉マラの家族は夫トドル・ラディヴォイェヴィチと一緒にマルセーユに移り住んでいたため、第一次世界大戦の混乱したセルビアの状況下で、ジュネーヴに置かれていたセルビア赤十字やベオグラードで発行されていた『ベオグラード新聞』を通して、家族の連絡をとっていたようである。マルセーユのマラの家族と東京のトドロヴィチが交信していたことも確認される。

Beogradske novine, 16.jula 1916; *Beogradske novine*, 2.novembra 1916

⁷³ 「憐れなる塞國人の為に」『東京朝日新聞』1915 年 10 月 24 日朝刊。

⁷⁴ 「塞國民義損講演」『東京朝日新聞』1916 年 2 月 3 日朝刊。

⁷⁵ 「塞國政府の謝意」『博愛』354 号、1916 年 10 月、37 ページ。

⁷⁶ 「塞國へ義損送付」『博愛』352 号、1916 年 8 月、39 ページ。

⁷⁷ 「トドロヴィチ教授感謝」『博愛』361 号、1917 年 5 月、22 ページ；「英塞兩國寄贈品発送」『博愛』365 号、1917 年 9 月。

⁷⁸ JACAR Ref. B12082281600 39. 在東京 International Institute 教授 Dusha N.

赤十字社が、個人として多額の義援金を提供した三菱財閥の四代目・岩崎小彌太(200円)、森村財閥の創設者・森村市左衛門(300円)、金光教の三代目・金光攝胤(250円)の三氏に謝意を表して、慈恵十字記章をトドロヴィチのもとに送って来た。1917年12月7日、トドロヴィチは慈恵十字記章を携えて日本赤十字社を訪れ、石黒社長が3氏の代理人に記章を贈呈した⁷⁹。この贈呈式で、トドロヴィチはなおテッサロニキ戦線が膠着状態にあり、セルビア国内には子供、老人、傷病兵しか残っていない惨状⁸⁰を伝えた。同時に、セルビア政府はこれら3名への慈恵十字勲章のほか、塞國救難会の賛助者と幹事に聖サヴァ勲章を、貴族院議員の小澤武雄と安川隆治(私財400円を寄付)の両氏にセルビア赤十字勲章を授与する決定をし、トドロヴィチに宛てて発送する準備にあたっていることも紹介した⁸¹。

しかし、セルビア軍を含む協商国側がテッサロニキ戦線を突破したのは1918年9月末のことであり、ベオグラードが解放されたのは11月初めであった。これ以後、セルビア政府および外務省が国家の機能を円滑に果たせるようになったらしく、セルビア政府からの勲章がロンドン駐在のセルビア公使から日本の珍田・駐英大使を通じて、第一次世界大戦終結直後の1919年初めに日本外務省に送られてきた。外務省からの依頼を受けて、日本赤十字社が2月10日に叙勲の授与式を行った。塞國救難会の鍋島侯爵夫人にこのなかでは最高の聖サヴァ三等勲章が、カテリーナ夫人とマレフスキー駐日ロシア大使令嬢エフゲニヤには同五等勲章が、小笠原伯爵夫人他5名に聖サヴァ四等勲章が、トドロヴィチには白鷺五等勲章が与えられた⁸²。このように、トドロヴィチはカテリーナ夫人とともに塞國救難会を通じて、激烈を極めた戦争で想像を絶する被害を受けたセルビアへ人道支援を続けた。二人の献身的な活動がセルビア赤十字社の厚い信任を受けることになったのは当然と言える。

Todorovic 二関スル件(「セルヴィア」赤十字社二関スル件)、大正6年(1917)(外務省外交資料館)。また、第一次世界大戦期のロシアにおけるセルビア人や南スラヴ研究の第一人者ポポヴィチは、トドロヴィチがロンドン駐在のセルビア公使に宛てた1918年7月24日付の以下の報告を引用している。「知り合いになった数人のチェコ軍団将校から伝え聞いた情報によると、ウラジオストクに約150人ほどのセルビア人とクロアチア人がいるが、かれらは統一的な行動をとっているわけではなく、その多くは現地の反ボリシェヴィキ軍に参加している。10—20人はチェコ軍団にも加わっている。」 Никола Б. Поповић, *Срби у грађанском рату у Русији 1918-1921*, Институт за савремену историју, Београд, 2005, 101.

⁷⁹ 「塞國記章傳達」『博愛』368号、1917年12月、22ページ。

⁸⁰ コラム「豆えん筆」『読売新聞』1917年12月9日朝刊。

⁸¹ 「ト教授の演説」『博愛』369号、1918年1月、10—11ページ。

⁸² 「塞國勲章授與式」『博愛』383号、1919年3月、19ページ。この記事には、エフゲニヤ嬢が住所不明のため、取り調べ中と記されている。1917年のロシア革命以後、混乱した状況のなかで、帝政時代の外交官や家族がどのような運命をたどったのか、興味深い問題である。

むすびに代えて

これまで概観してきたように、トドロヴィチはハプスブルク帝国の辺境地スルチンでセルビア人として生まれ、大学の1年時までセルビアの首都ベオグラードで過ごした。19歳の時、ロシア帝国のペテルブルク大学に留学して博士号を取得し、ロシア人のカテリーナ夫人と結婚しロシア国籍を取って15年間ほどロシアで生活した。その後、「露国人」教師として日本にやって来て第一次世界大戦を迎えた。故郷であるセルビアを救援する目的で塞国救難会を設立し、遠く離れた日本から赤十字社を通じて救援活動を行った。東京外国語学校でロシア語を教える傍ら、セルビアの惨状を講演会などで一般の人々にも広く伝えたのである。

この時期、トドロヴィチはカテリーナ夫人とともに、ロシア大使館や東京に住むロシア人と親しく交流していた。故郷であるセルビアの戦況に心を痛める一方で、1917年のロシア革命により帝政ロシアが崩壊したことは、「露国人」として一大事だったであろう。二月革命後の4月30日付けの『東京朝日新聞』には「在留露人会合」という小さな記事が見られる⁸³。この記事によると、委員のトドロヴィチを含む東京や横浜在住のロシア人が29日に帝国ホテルで会合を開き、二月革命記念の行事や露国協会設立を検討したとされる。この会合には警視庁の認可により、女性も参加したと記されている。カテリーナ夫人も新聞のインタビューで、二月革命を「目出度いこと」と言いきっている⁸⁴ので、この会合に参加していたものと思われる。ここから読み取れるのは、トドロヴィチ夫妻が二月革命による帝政ロシアの崩壊を肯定的に捉えていたことである。

この後、十月革命によりソヴェト政権が成立し、内戦が続くロシアに対してどのような考えを持っていたのかを自ら記した資料は見いだせないが、その一端を知る手掛かりはある。トドロヴィチ夫妻は、1917年の時点で15歳になっていたそれぞれの長男であるヴァレリアンとヤコブをハルビンの知人のもとに預け、ロシア語教育の受けられるハルビン商業学校（中等教育機関）⁸⁵に通わせていた。トドロヴィチの東京外国語学校の教え子である大谷二郎の回想による

⁸³ 「在留露人会合」『東京朝日新聞』1917年4月30日朝刊。

⁸⁴ 柴理子、前掲論文、19ページ。

⁸⁵ 正式名称は東清鉄道付属ハルビン商業学校であり、この学校については、内山ヴァルーエフ紀子「ハルビンのロシア人学校——初等・中等教育編」『セーヴェル』第9号、1999年6月、1-30ページ。なお、ヴァレリアンとヤコブはハルビン商業学校を卒業後、極東地域で高等教育をうけたものと思われる。その後、二人はトドロヴィチの二男のドラグティンとともに、1921年に夫妻の知人を頼りにアメリカのカリフォルニア州に移住し、アメリカの大学を卒業して、医者や技術者として生活した。

と、ハルビンの日本総領事館に勤務していた大谷のもとに長文の手紙が届いた。卒業間際の二人が二月革命後の混乱したシベリアで活動を始めたセミョーノフの義勇軍(白衛軍)に参加しようとしているので、これを思いとどまらせ、学業に専念するよう説得してほしいとの依頼であった。大谷はこの依頼に応じて、二人を説得したという⁸⁶。

このエピソードは1917年のことであるが、翌年8月には、日本が「チェコスロヴァキア軍団の救出」を口実としてシベリア出兵に着手し、1922年までロシアの内戦に関与することになる。シベリアの地で赤軍や非正規軍との戦争を継続する日本で生活していた「露国人」トドロヴィチ夫妻にとって、ソヴェト政権との距離の取り方が困難であったことは容易に想像できる。このような状況において、トドロヴィチは塞国救難会を通じて日本赤十字社と緊密な関係をもっていたからであろう、1919年1月にチェコスロヴァキア軍団の傷病兵がウラジオストクから日本赤十字社病院に送られてきた際には、通訳を依頼されている⁸⁷。また、1918年12月に建国された南スラヴ人の統一国家セルビア人・クロアチア人・スロヴェニア人王国の公館が日本には置かれていなかったため、この新生国家は東京のフランス大使館を通じて、トドロヴィチに青野原(兵庫)や習志野に収容されていたハプスブルク帝国の南スラヴ人捕虜の本国帰還に関する面談を依頼している⁸⁸。

第一次世界大戦を通じ、トドロヴィチは自らの意志で故国の救援活動を行う一方、赤十字社や政府の依頼を受け日本で、通訳や民間の外交官のような仕事をこなした。この時期、「露国人」トドロヴィチの心に、セルビアの存在が急速に大きな位置を占めるようになったことは確かであろう。しかし、新生国家の建国に関わる仕事に携わるなかで、南スラヴ人の統一国家にも強い関心を示し、以後、戦間期を通じて、日本でユーゴスラヴィア政府の「代表」としての役割を果たした。いく度となく国境を越えて生活をしてきたトドロヴィチにとって、国籍⁸⁹の選択は生活をするための方便にすぎず、セルビアからユーゴスラヴィアへのアイデンティティの移行も、大きな問題ではなかったものと思われる。

⁸⁶ 大谷二郎「トドロウイツチ先生の想出」『會報』第21号、1935年12月、33—35ページ。

⁸⁷ 「チェック患者入院」『博愛』382号、1919年2月、11ページ；「チェック患者退院」『博愛』383号、1919年3月、18ページ。

⁸⁸ JACAR Ref. B07090924600 26. 外国語学校教授「トドロウイツチ」氏「ユーゴスラヴ」人俘虜訪問ノ件、大正8年(1919)8月27日～9月27日(外務省外交資料館)。

⁸⁹ トドロヴィチは1940年7月31日に横浜から離日する際、アメリカに向かう「新田丸」の乗船名簿に国籍をユーゴスラヴィアと書いているので、これ以前の時期にロシア国籍から変更していたか、二重国籍を有していたことになる。

写真1 ハバロフスク時代の同僚と、左端がトドロヴィチ (1907年頃)



写真2 トドロヴィチと息子(二男のドラグティン?、1905年頃)



写真3 トドロヴィチ夫妻と4人の息子（東京、1913年）



写真4 ヒンディー語教師、インド人のバラカトゥッラーがトドロヴィチに宛てた新年の挨拶状(1913年)。背後に英字雑誌『イスラーム同胞』が見える

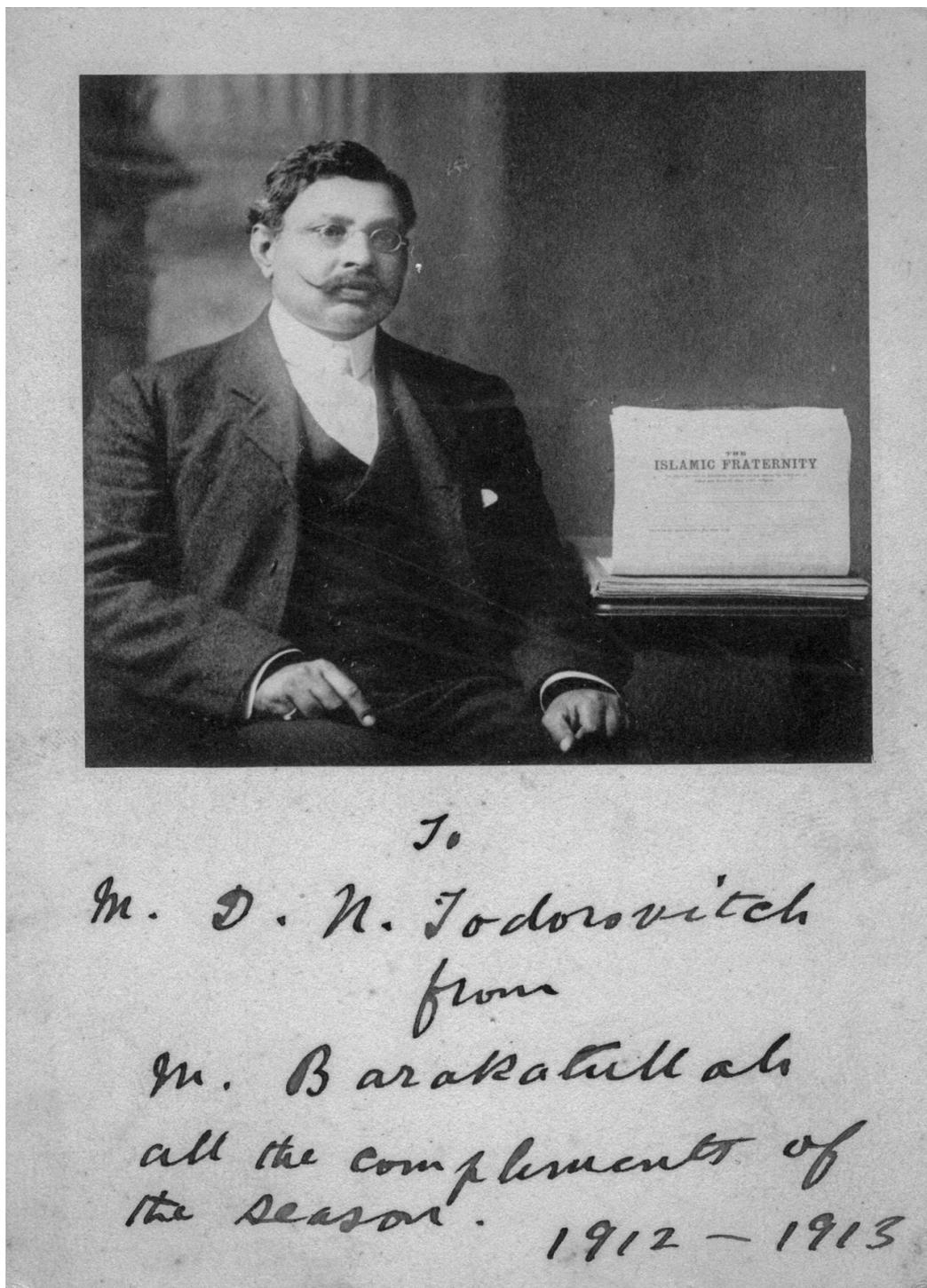


写真1-3は、カリフォルニア在住のデイナ・トドロヴィチ(Dana D. Todorovic)氏の個人所蔵

写真4は、ナープルステク博物館(プラハ)所蔵(A・ニクル文書)